



2026年8月23日 説教「都のために泣く主」

ルカの福音書 19章 41～48節

前段において、ヘルモン山のふもと町の町において、ろばの子に乗られて進まれたイエス・キリストについての記事から学びました。そして、いよいよ、主イエスはエルサレムに入っていくことになります。

1. エルサレムを臨み (41～42節)

①都を見られ(41)「エルサレムに近くなったところ都を見られたイエスは、その都のために泣いて、」

オリーブ山の裾野の小高い所から見ると、向こうの小高い台地のエルサレムの町が視界に入るといいます。イエスはそのようにして、エルサレムをご覧になりました。その時に、イエスは都のために泣かれたのです。かつて、死んだラザロの姿を見て「イエスは涙を流された」(ヨハネ11:35)とありますが、ここでは都エルサレムの将来を思いつつ泣かれたのです。

②平和のことを (42)「言われた。『おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。』」

イエスは「おまえも、この日のうちに、平和の事を知っていたら」と言われました。当時、パックス・ロマーナ(ローマの平和)という風潮のなかに、イスラエルの民も踊らされていました。しかし、いわば政治的にもたらされたそのような平和は崩れ去るのです。

③目から隠され (42)「しかし、今は、そのことがおまえの目から隠されている。」

ところが、その当時の民はそれが本物の平和でないことに気づかなかったのです。霊的な眼差しが閉ざされ、隠されてしまっていたのです。本当の平和が何であるかを求め、知っていたなら、将来起ころうとしていることに対して、別の対応もできたかもしれない、ということでありましょう。

2. 四方から攻め寄せられる (43～44節)

①おまえの敵が (43)「やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、」

ここで「おまえ」というのはエルサレム、またその民をさしています。「おまえの敵」とは、この時点でわかっていません。その敵がエルサレムの周りに、陣地を作って取り巻くというのです。どこの国でも、その攻め方は同じです。大阪城のような堅牢な城であっても、徳川の攻撃でついに落城したのです。エルサレムも、四方から攻め寄せられていくことになります。

②地にたたきつけられ (44)「そしておまえとその子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたまままで残されない日が、やってくる。」

そして、おまえ(エルサレム)とそこにいるところの人々は、子どもたちを含めて、地にたたきつけられることになるということです。衝撃のほどの大きさがうかがえます。ウクライナ、ガザ、イランなどで犠牲となっている民衆のことが現実的に迫って来ます。今ここで、エルサレムは「一つの石も他の石の上に

積まれたまま残されない」とあるように、無残にも徹底的に攻め滅ぼされてしまうのです。そのような日があると、イエスは言われます。

③神の訪れの時 (44)「それはおまえが、『神の訪れの時を知らなかったからだ。』」

主イエスのお言葉は人々の心に探りを入れられています。つまりは、「神の訪れの時」というのは、エルサレムにもその民は霊の目をあけていれば知ることができるのですが、彼らはそれを見逃がしてしまうのです。それは私たちにも同じことが言えます。神の私たちへの語りかけを耳にしたり、知らされていても、それを無視していないでしょうか。あるいは、見ることを拒否してはいないでしょうか。

3. エルサレムに入ったイエス (45~48 節)

①祈りの家 (45~46)「宮に入られたイエスは、商売人たちを追い出し始め、こう言われた。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にした。』」

いよいよイエスはエルサレムに入られました。後からみれば、イエスにとっての最後の週です。ここで宮というのは、神殿という建物だけを指すだけでなく、広い意味での境内を表し、内庭、婦人の庭、異邦人の庭と称される外庭といった所があり、その最も中心には聖所があったわけです。その異邦人の庭において、商売人たちが捧げものにする小動物を売っていたのです。その時にイエスは彼らをそこから追い出されました。そして、「祈りの家を強盗の巣とした」と厳しく戒められたのです。宮きよめの出来事はイエスが宣教開始の頃にもなさっています。(ヨハネ 2:13~)

②イエスを殺そうと (47)「イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者、民のおもだった者たちは、イエスを殺そうとねらっていたが、」

エルサレムに入られてから、イエスは毎日、宮で教えをしておられました。祭司長、律法学者、民の主だった者たちが、イエスを殺そうとねらっていました。その教え、行動、影響などは、ユダヤ人社会を乱し、宗教社会の中心にいた人々にとっては、その存在をおびやかされるとも感じていたと考えられます。

③熱心に学ぶ人々 (48)「どうしたらよいかわからなかった。民衆がみな、熱心にイエスの話に耳を傾けていたからである。」

しかし、彼らもうかつに手を出すわけにはいきませんでした。なぜなら、民衆が熱心にイエスの話に耳を傾けていたからです。そこに入り込んで、いくとすると、民衆の反感を買うことは確実であったからです。

《結論》

あなたはかつて、どんな時に泣きましたか。私が次のような時に泣きました。まずは、主の前に悔い改めの祈りをした時。洗礼は受けていましたが、実質的なクリスチャンとしての歩みの始まりの時でした。次に思い出すのが、長老教

会の教師任職の日に中会で説教をし、最後のほうで声が涙で出なくなってしまったことがありました。挫折があったからです。そして、母の召天の出来事。苦勞の多い人生だっただけに、涙が溢れたことを覚えています。

イエス・キリストはここで、都エルサレムのために泣かれました。なぜでしょう。それは、第一には今朝の聖書箇所に記載されているように、エルサレムの滅びを予知していたからです。神殿崩壊の出来事が紀元 66~70 年のローマ軍の侵攻によってなされることがイエスには見えていたのです。エルサレムの周囲には壘が築かれ、四方八方から攻められ、住民の被害は甚大で、建物などを見る影もないほどに破壊されてしまったのです。ローマ帝国の属国としての状態をなんとか保持されていた時代から、総督フロルス of 圧政により、民衆が反乱を起こし、それにローマ軍が鎮圧に乗り出したというわけです。エルサレムはダビデの時代に都となり、宗教的な中心地でありました。民の信仰の育みに用いられた地が、崩壊してしまうことになることを予知し、イエスは泣かれたのです。

しかし、イエスは起ろうしている外側の出来事だけに泣かれたのではありません。むしろ、それ以上にエルサレムに潜む信仰の実態に泣かれたのです。宗教家たちは墮落していました。彼らは自分達の立場を守ることに関心が向けられていました。律法主義を推し進めて、民衆を律法でがんじがらめにしました。彼らが教えたのは生きる信仰ではなく、形だけの教えた。それでは、人々はどうだったでしょう。人々も宗教家たちに応じて、生きた信仰を失いかけていました。彼らには、イエスの教えに飢え渇くように、熱心に聞いていますが、そこには求める心がありました。しかし、それはほんの一部でした。民の信仰の実状は、この記事にもあることにも現れています。宮では信仰が隅におかれて、商売とお金のことが先になっていました。ここで売られていた動物は罪の赦しを得るための犠牲(いけにえ)でした。つまり、その本来の目的は、犠牲をささげて、悔改め、赦していただくという礼拝でありました。ところが、それは忘れられて、商業的利益のために形ばかりが残っていたのです。その責任は、宗教家たちにあったのですが、ここでイエスは宮きよめをして商売をやめさせました。彼らの信仰の目を覚ますためでありました。

イエスは彼らの信仰と霊性が失われていたことを泣かれていたのです。そして、その罪の贖いのために、自らが犠牲(いけにえ)となって、十字架にかかることを確認されました。今や、人間の罪のために死ぬことは、キリストの究極的使命でありましたが、そのことがいよいよ目の前に迫っていました。エルサレムの町を見ながら泣いて、そのことをお受入れ下さっているのです。

私たちは改めて、主が泣いてくださったお心を覚え、十字架の主をあがめていきたいと思います。また、生きた信仰を求めていこうではありませんか。

そして、主イエスをご覧になり泣かれたエルサレムは、天国の型(モデル)でもありました。これから歌う讃美歌 485 番にはこうあります。「母なる都よ、エルサレムよ」(1 番)、「エルサレムわが家、母の都、世の旅果てなば、ゆかせたまえ」(4 番)。私たちも永遠の都エルサレムを目指していきましょう。